

# 分散会 9

司会者 石城戸 美恵子  
記録者 八木 良  
会場責任者 塚 雅子

## マサイ族（高知県）

PTAのOBや地域のボランティアで、子ども支援グループ「マサイ族」を結成、現在、会員は40名ほど。8年前から須崎市内の小中学校でのあいさつ運動や、環境美化活動に生き活きと取り組んでいる。命名は、マサイ族の村長を務めている元校長先生の名前から取っている。基本的に、実存するアフリカのマサイ族とは関係はないが、アフリカのマサイ族のことわざに「一人の子どもを育てるには、村中の大人の力が必要」とあり、これに倣って、子どもを中心に据えた支援の取組を行っている。

様々な地域行事にも参加し、心から血を流す子どもたちに、「否定のシャワー」から「愛のシャワー」を掛けることを心がけ、子どもの孤立化を防いでいる。私たちの活動は、「未来のある学校・地域」をつくるための種まきであり、次の世代への予防策と位置づけ、地域コミュニティの再生に取り組んでいる。



田部 雅彦氏

## 愛媛県教育研究協議会伊予支部

伊予地区各地で子どもたちに楽しい体験活動の場を提供することを目的として「おもしろ学校」を開催している。阪神淡路大震災でのボランティア活動での経験を生かし、東北大震災後は、宮城県山元町にもち米を届ける活動を続けている。「おもしろ学校」では、伊予地区の小中学校児童生徒に協力を呼びかけ、田植え、稲刈り、餅つきを行っている。毎回100名を超える参加があり、その都度、山元町の復興の様子や福島の状態を伝えてきた。また、年末には有志会員を募り、子どもたちが作った鏡餅ともち米を持って山元町を訪れている。現地で餅つきを行っているが、これが年末の恒例行事となりぎわっている。また、2年前からは、南相馬市の被災地とも交流をしている。

この活動も4年目を迎え、現地の方はやっと震災当時の様子を話してくださるようになった。東北と伊予、それぞれの人々の思いをつなぎたいと思っている。今年も無事に秋の収穫を終えた。



森岡 郁雄氏

## すいてん・はーと（愛媛県）

愛媛県ユニセフ協会のご協力をいただき、トーンチャイムを使っの音楽療法講座に、世界で活躍する地元出身の古佐小基史氏のジャズハーブをトーンチャイムの演奏にリンクさせて実施した。この活動は、愛媛県ユニセフ協会の「よい音楽を子どもたちに届けたい」という考えとも一致し、共催として取り組むことにより、「すいてん・はーと」とユニセフの共同事業として新たな発見と力を得た。

参加した子どもたちを含め、全員参加のワークショップを行い、好奇心を持つこと、協調をすること等の大切さを体感することができた。また、愛媛県ユニセフ協会事務局長と古佐小氏のトークライブも行われ、世界の子どものライフスタイルや音楽が生活にどのように関わっているかを聞くことで、「音を楽しめる＝平和」であることに気づくことができた。子どもの育みにかかわる事業の一つとして大きな成果を感じた活動であった。



武智 理恵氏

## 【分散会の協議内容】

### (1)「マサイ族」さんの発表について

Q 荒れていた時期を経て良くなってきたという状況がよく分かったが、荒れていた子どもたちの保護者には、どんな変容があったのか。

また、行政とか様々な機関・団体等と連携しておられる中で、貴団体の活動は、セーフティーネットの役割を果たしている部分もあると思うが、このネットにもこぼれている子ども（参加してほしいが参加しない子ども）に対して、どのような配慮・手だてをされているのか。

A まず、あいさつ運動については、長く継続して活動してきたので、最初は3人で始めたが、徐々に学校の先生、PTA、生徒会の子どもたちという風に増えていった。「継続は力なり」を実感している。

また、イベント等を開催する際には、来てほしいけど来ない子どもたちを中心に置いた取組をするようにしている。そうすることで、不登校の子どもも来てくれた。また、こういった子どもたちも自分を必要としていてくれるように思っている。「寄って来ない」ではなく、「自分たちが寄って行く」という姿勢が大事である。行政関係のメンバーもいるが、よく協力してくれ助かっている。

(村長) 私たちの取組である「0円食堂」では、来てほしい子どもやその親が、家族ぐるみで来てくれる。これがうれしいし、私たちの組織のよさであると思っている。携帯電話など子どもたちのネットワークで子どもだけでなく保護者も集まってきてくれている。こうして、少しずつではあるがつながりが広がってきている。

また、困っている家庭に掃除に行ったり、食事を作ったりするのに協力者も増えてきている。子どもと共にPTAを卒業して「終わり」というのはおかしい。卒業後も学校に関わりたい。そんな大人が、まず、つながって、子どもに目を向けていくことが大切である。

Q 様々な活動によって、問題を抱える子どもたちと地域との関係、地域の中での居場所はあると思うが、肝心の子どもたち自身の中に居場所がないと非行に走ってしまう子どもも出てくると思う。子どもたち同士で考えて活動するなど、お互いに関わりあえる活動はされているのか。

A あいさつ運動の参加では、子どもたち自身が考えて、「やりたい」と言ってくれた。こういった考えが少しずつではあるが浸透してきていると思っている。また、子どもたちのイベントも仕掛けている。例えば、毎年やっているお手玉大会は最初子どもたちが中心になってやっていたが、紆余曲折を経て、今では須崎市以外の人やお年寄りも参加して活動している。また、ふれあい夏祭りでは、子どもたちとお年寄りとの昔遊びの活動も行っている。

ゆるキャラの「しんじょうくん」が大健闘しているのを受けて、中学生が「須崎市のPR曲を作りたい。」と言い出して歌を作ることにした。中学生たちが須崎市の良いところを歌詞にして、作曲を高知出身の織田哲郎さんに依頼した。最初は断られた。しかし、ここからが偉いが、子どもたちはあきらめず、みんなで手紙を書き、再度お願いに行ったら、織田さんも子どもたちの熱意に打たれ、「すさきがすきさ」という歌を作曲してくださった。現在では、この曲は毎日午後5時に須崎市の防災無線で流され、市民みんなに親しまれている。

(村長) 学校の先生方も私たちの活動に期待をしてくれていて、子どもたちを学校の内と外から見守っている。

### (2)「愛媛県教育研究協議会伊予支部」さんの発表について

Q もち米づくりをした子どもたちは、一緒に山元町に行きたいとは言わないのか。

A 行きたい子は多い。「父親が東北にいるので会いに行くついでに連れて行ってほしい」といった希望もあった。基本的に、行ける人はいいいよというスタンスである。是非にも行きたいという教え子等の大学生が、毎年3~4名くらい行っている。

Q 東北にもお餅を食べる文化はあるのか。

A ある。ただ、こちらのように、丸めてあんこを入れて食べるのではなくて、ちぎって“ずんだ”（枝豆をつぶしたもの）をつけて食べるといったスタイルである。

Q 継続したボランティア活動で素晴らしいと思う。ポンジュースをプレゼントしたということであるが、予算はどうしたのか。また、ポンジュースの会社と協賛はしているのか。

A 愛教研の活動費等を活用している。私たちの学校では、給食に毎週1回ポンジュースが出ているが、残念ながら協賛はしていない。

Q こういった小中学生の活動では、中学生の参加が少ないように感じる。そこで、こういった活動がどのようにされているのか、知らせることが大切だと思うが、どうされているのか。ホームページなどで紹介をしているのか。

A こちらで餅つき大会をするときに、前年の訪問の様子をビデオで見せたり、授業の中で知らせたりしている。ホームページはないが、個人的にフェイスブックで公開している。また、今は、東北に向けた活動をしているが、マサイ族さんのように、参加してくれない子どものことを考え、自分たちの足元をしっかりと見つめた活動にしていきたい。

Q 活動しているメンバーは、固定化した同じメンバーでやっているのか。

A 主となるメンバーは変わっていないが、続けていたら興味のある人から少しずつ広がってきている。中でも、校長先生が興味を持たれていると、参加者は増える傾向にある。また、教育会からも資金援助があるなど協力者は増えている。

### (3)「すいてん・はーと」さんの発表について

Q トーンチャイムを初めて知ったが、どちらから手に入れたのか。

A ハンドベルの補助楽器としてアメリカで生まれて、20年以上前に日本に入ってきた。東京から松山に伝わったのが、22年くらい前である。アメリカのものとは違い、日本人向けのものになっている。「すいてん・はーと」はNPO法人化をせず、ボランティア団体として活動している。幼稚園や保育園などでも活動している。

Q 幼稚園や保育園、乳児園などでは、年間どのくらい活動をしているのか。また、子どもの感性を磨くのに音楽は大切だと思うが、どんなやり方をしているのか。

A 1か月おきに30分の枠をいただいて、私たちの曲を演奏したり、子どもたちと一緒にキラキラ星を演奏したりしている。何年も訪問している幼稚園では、子どもたちの集中力が身につくよく聞いてくれる。赤ちゃんも、上の子を見習ってよく聞いていると感じている。

Q 小さな子どもにとって音楽っていいなあと思う。うちの学校にもトーンチャイムがあるが、被災地で演奏するのにはどんな曲がいいか。

A 25本セット全部ありますか。震災の後、生活が落ち着いてくると子どもたちって、大人が思っている以上に、音楽や絵本を渴望している。演奏はどんな曲でもいい。

Q 水曜日の午前中に活動されているということであったが、メンバーによっては、仕事などで参加できない人もいないのか。



分科会9の様子

A 仕事のある人は来られないので、土曜の夜に活動したり、仕事をやりくりしたりして練習している。練習すると、力が湧いてくる感じがする。

Q 今回発表いただいた事業は、有料で行ったということであるが、有料だと人が集まりにくいのではないか。一方、活動するには資金もある程度は必要である。有料でありながら、このように人を集めるにはどうしたらよいか。

A 地域教育実践交流集会のメンバーに、メールで案内したり、小学校の校長先生にお知らせしたり、いろいろなところにチラシを配布させてもらったりした。有料にしたが、自分たちの運営資金ではなく、全額をユニセフや共同募金に寄付したので、そのことが良かったのかもしれない。

- ・ 私は、この会に参加していたが、ホールは満員だった。耳の聞こえない人も来ていたが、目で見て体で感じるとても良い音楽会だった。

- ・ あまりにも感動したので、帰りの車の中では、音楽をかけるのをやめて、余韻に浸りながら帰った。

この演奏会について、ラジオで告知してくれたのも、人が集まる要因だったと思う。新聞社やケーブルテレビ等、いろいろなお店にお願いした。

#### (4) その他（悩みとか活動で困っていること）について

○ 先ほどの発表の追加になるが、勉強のできる子や良い子は、大人になったら都会へ出て行ってしまつて地元に残らないことが多い。一方、地域でしんどい子や地域に溶け込めない子は、地域に残ることが多く、地域を支える人材になる。だからこそ、地域に居てくれる子どもを地域で育てて、地域に役立つ子に育てていかなければならない。今は、その種まきをしていると思っている。

○ 一番の問題は、地元の仕事がないことである。優秀な子は都会へ出るが、都会へ行けない子も仕事に就ける準備をすることが大切である。仕事がないからといって、彼らを放っておくことはできない。仕事の面倒まで見ることにについては、今後の課題である。

○ しんどい子らは地元で居るしかない。地域に居場所がなければ、学校で暴れるしかなくなる。こういった子どもたちを地域と交わらせて、地域に居場所を作ることが大切である。プラスの連鎖を期待して活動をしている。

#### (参加者同士の交流で)

○ 子どもの支援サポートで、坊ちゃん劇場では演劇を子どもたちに観せているが、私も先日見に行つて感動した。年間どれくらい子どもたちが観劇しているのか。

- ・ 2万3千人くらいの子供たちが、観に来てくれている。10年前の初めの頃は、1万人くらいであったが、東予や南予の子供たちにも観せてやりたいということで、大人たちがお金を出資して、遠い地域の子供たちが観られるように、バス代を援助できるようにした。このことも、人数が増えた要因だと思う。

- ・ 劇のテーマを、四国や瀬戸内の題材にしているので、参加者の中には地元を見つめ直し、改めて地元を誇りを感じたという子供の感想文をいただいた。また、不登校の子供が登校し始めたとか、「自殺を考えることもあったが、観劇をしてから自殺を考えなくなった。」という福島からの子供の話も聞いている。

○ 私たちも共同の子育てをしようと活動をしているが、今日の発表では、子どもを中心に置いて頑張っていることに感動をした。人集めとか人脈の活用などで、苦勞することはないか。

- ・ 私はPTAの役員から引き続いてやっている。人材確保が一番いいのは、PTAの役員を卒業したときに離さないように継続して協力してもらうことが効果的である。学校の先生にも協力してもらっているので、その面ではさほどの苦勞はないと感じている。